

感謝

長野貞春さんの功績を偲んで



2008年2月11日に開催された「桜日本一の里づくり」運動の桜の贈呈式で当時の今村輝昭南阿蘇村長に桜の苗を渡す故長野貞春さん

毎年、桜の季節になると県内外から1万人もの観光客がアスペクタの桜を見物に訪れます。今でこそ、約6,700本もの桜が咲き誇り、県内でも有数の桜の名所として認知されているアスペクタですが、それは、先の4月8日にご逝去された長野貞春さんという一人の実業家の手によって生まれたものなのです。

長野貞春さんの生い立ち

長野さんは、南阿蘇村長野区の生まれで、生家は農業を営んでおられました。少年時代は幼友達と近くの田んぼでオタマジャクシやドジョウをすくって遊んでおられたそうです。

その後、熊本県立済々黌高校を卒業し、東京の大学に進学されました。そして民間企業に就職された後に、37歳で千葉県船橋市に建設会社を設立されて現在に至ります。また、地元の船橋市では現在64万人の人口を抱える大都市の市議会議員を務められたこともあります。

その他にも社会福祉法人を立ち上げ、保育園や障がい者施設の運営をする、ロータリークラブに参加するなど、船橋市では様々な社会貢献活動もされており、自身で書かれた書籍が出版されるなど、その活躍は多岐にわたられました。

熊本では、経済的な理由で高校・大学などに進学できない学生を対象とした「長野奨学資金」基金を立ち上げ、その奨学資金で有名大学などを卒業し東京の大手企業に就職する学生もいるなど、将来の人材育成にも大きな貢献をされました。

また、長野さんは、70歳を過ぎて大学に再度入学し、さらに大学院進学を目指してその後も勉強をされるなど大変な努力家でもあり、自身で設立された建設会社を軌道に乗せるなど、一代で今の地位を築いた大変な苦勞人であられたことから、人とはまず善意の気持ちを持って接するなど、話しているとその優しい人柄がにじみ出るような大変暖かい人でした。



「桜日本一の里づくり」運動で桜を植樹する長野さん(中央)



① 関東から長い距離を経て桜の苗が到着しました ② 現在のアスペクタで河津桜が咲き誇る様子 ③ 関東村人会で挨拶をされる長野貞春さん(2016年当時) ④ 関東村人会での集合写真(2017年当時)(中央)

長野貞春さんと南阿蘇村との交流

長野さんが南阿蘇村に帰郷した際に地元の人々と話すなかで、「進学で村外に出て行った子どもたちが南阿蘇村に帰って来ない」という話を聞いて、「自分の今があるのも故郷の南阿蘇村のお陰である、南阿蘇村に対して自分は何か出来ることはないのか」と思い始めるようになりました。

ある日、海外視察先のアメリカのワシントン州で、東京都が寄贈した満開の桜を見たとき、その見事さと寄贈があった経緯に感動され、「桜日本一の里づくり」運動による村おこしを思い立ち、南阿蘇村に対しての桜の贈呈を決定されました。

「桜日本一の里づくり」運動の始めとして、長野さんが上京されてから約50年がたった2008年2月11日、故郷南阿蘇村に関東から桜の苗木5,500本を積んだトラックがアスペクタへ到着しました。

その後も、毎年数千本の桜の寄贈がおこなわれ、アスペクタとそれ以外の場所に植樹されたもの、村民に対して配布されたものとを合わせ、最終的には平成23年までに15,000本(2,000万円相当)もの寄贈となりました。さらに、それだけではなく桜の育樹管理費として、その後数年間にわたって寄付をいただき、南阿蘇村に対し多大な貢献をされました。

村長より一言

長野さんと南阿蘇村との繋がりは「桜日本一の里づくり」運動だけではなく、南阿蘇村出身の関東在住者と南阿蘇村とを繋ぐ組織である関東村人会の会長もその発足から長く務められ、様々な活動に貢献いただきました。

その中でも特筆すべきは、平成28年熊本地震の際、地震から1週間もたたない4月22日という早い時期に、長野さんを始めとする関東村人会の皆さんからの支援物資を届けていただいたことです。これほど早期に支援物資が届けられたのは、長野貞春さんの長男で現船橋市議会議員の長野春信さんたちが、直接、地震の傷跡が残る山道を通って南阿蘇村に物資を運搬されたからです。このことは、村人会の皆さんの南阿蘇村に対する思いを感じた瞬間でもありました。村民を代表して深くお礼申し上げます。

結びとなりますが、今後の南阿蘇村と関東、関西村人会の皆さまとのますますの繋がりを願い、長野貞春さんのご冥福をお祈りするとともに、そのご家族の皆様のご益々のご発展とご活躍をお祈り申し上げます。

南阿蘇村長 吉良 清一